

大学生のための動機付け学習法

Motivation Learning Method for Students of University

電機大工 °曾江 久美, 本橋 光也, 丹羽 雅昭, 田巻 明

Tokyo Denki Univ. °Kumi Soe, Mitsuya Motohashi, Masaki Niwa, and Akira Tamaki

E-mail: soe@chiba.dendai.ac.jp

はじめに：現代の大学進学率は、およそ 52%（昨年のデータ）である。全入時代を過ぎ、また理工系大学においては、本来習得しているはずの基礎知識が不十分なまま進学する学生が定常化している。入試科目の多様性による弊害である。学生は大学に合格することだけを目標とし、自分が得点を上げやすい教科に的を絞って受験する傾向があるため、入学してきた学生の理系的な能力や知識には大きな差がある。一方、大学では各学科に合ったカリキュラムを設定しているため、入学者の持つ知識との間にズレが生じてしまっている。またこれも、現入試制度が系統的に学習するノウハウを持っていないため（学生自身の大学で学ぶための道具も揃っていない）、入学当初より学習面のみならず、技術面、精神面両方の支援も必要になってくる。工学部に進学してきた学生で高校時代に物理をあまり選択しなかった者は、最初から理系の講義に関してモチベーションの低下を招いてしまっているだろう。彼らが最初に学習する低学年次の授業においては、学習面での創意工夫や学習環境の整備が大きな課題である。これは指導する側の課題であるが、学生側にも自らの意識改革が必要である。基礎教育が充実されず、学生の学習することへの意識（目的意識、目標設定、学習意欲等）が不十分であれば、高学年次での専門教育に大きな影響を与える可能性があるだろう。そこで私達は基礎教育の充実化と学生の意識改革を図る試みとして、コーチングの視点を取り入れた、学生自らが考え、学習を進めるシステムを考案した。

方 法：授業の第1回目に、学生はこれから始める勉強に対する意識調査を受け、本当に自らが授業を受けるにあたって思っていることを拾い出すためのワークシート作成を行う。このワークシートを通じて自分の考えていることを明確化し（Step1）、次に、自分がどうしたいのか宣言させる。すなわち、授業の初期段階で学生の意識を明確にし、目標のための計画を立てさせる。ここで、学生は自分の能力を知る必要がある（現在の自分との直面）（Step2）。個々の主熟度に関しては、授業開始時に簡単な小テストを実施することで得る。これらの過程を通じて学習スタート時の学生の状況が明確化され、漠然と「思っている」ことから「強い決意」へと学生の意識を移行させることを行う。次に、学生個々に授業における目標設定を再度行い、授業と小テスト、および教員から渡されるシートを作りながら、自分の計画とのギャップを検討する振り返り作業を行うことで、学生自らの目標に到達するように支援を行っていく。

まとめ：今回は、学生の意識の明確化を実施することで、授業に対するモチベーションの向上を考えた。この手法は、学生自らが考え、実行することで目標に向かうシステムであり、教育の質の向上につながると考えられる。

参考文献：コーチ・エイ著、鈴木義幸監修「コーチングの基本」、日本実業出版社(2015)